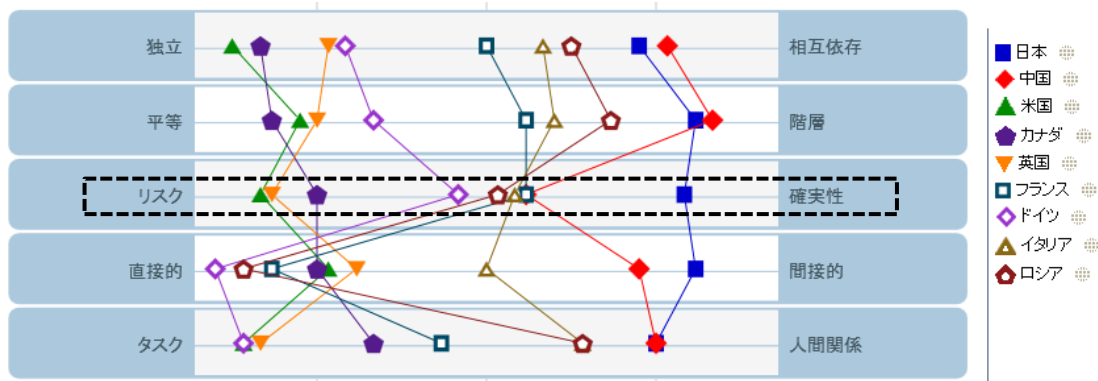


リスクと身体性

富永 朋義 (AIG 総合研究所所長)

日本人は総じて「リスク志向」が低いといわれています。下のグラフは、Aperian Global^(注)が開発した GlobeSmart という行動プロファイルの直近の結果ですが、他国と比べると日本はリスク志向(確実性志向)がもっとも低い(高い)です。ここでいう「リスク志向が高い」とは、柔軟性そして自主性が重要であると考え、完璧さよりも素早い意思決定に価値を置く傾向にあることと定義しています。ちなみに、対極にあるのはアメリカとイギリスです。



また、1980年にオランダの社会学者ヘールト・ホフステッド氏 (Geert Hofstede) が国民性の違いを定量化した指数でも、日本人は不確実さを避ける傾向にあるとのことでした。40年経ても同様の結果が出ていることをみると、それが日本人の全般的な行動様式のデフォルトなのかもしれません。そして、そのような行動が生活を送る上でふさわしかったののかもしれません。

ただ、これからもそのデフォルトが有効とは限りません。国内外ともに不確かさが増しているからです。その状況下で確実性を求めすぎると、適時の判断を妨げるだけでなく、不確実さをなくそうとするあまり費用対効果を無視した行動に陥る可能性があります。

行動のデフォルトについて、社会心理学者の山岸俊男氏 (北海道大学名誉教授) は、『リスクに背を向ける日本人』という共著でこう述べています。

「何をしないといけないかがはっきりしていないときにデフォルトでとる行動には文化差があるけど、手掛かりがはっきりしていると、日本人もアメリカ人も同じ行動をとる。」

自分がどういう状況に置かれているのかわからなければデフォルト、クセが顔を出し、わかれば違った判断をする、その判断に国の違いはあまりない、ということのようです。

では、「わかる」ためには何が必要なのでしょう。人間酷似型ロボットの第一人者である石黒浩氏 (大阪大学大学院基礎工学研究科システム創成専攻教授 (特別教授)) によれば、ふたつ以上のモダリティのつながりが大事であるとのことです。以下、著書『アンドロイドは人間になれ

るか』の一節です。

「人間は、あるモノに対して「形とにおい」「形と声」のようなふたつの要素が重なり、つながると「わかった」と思う。この、人間が何かを認識するのに必要な要素を「モダリティ」という。モダリティとは、簡単に言えば知覚のことだ。視覚、聴覚、触覚などの感覚をもちいて、外界を知覚する手段のことである。」

モノではないリスクは言葉や数字で語られることが多いですが、それだけに、その内容をわかるためにはより多くの知覚を使うこと、つまり「身体性」にもっと目を向けることが大事なのではないでしょうか。

多くの知覚を使うことでリスクがわかる、それがリスクへの向き合い方における行動のデフォルト、クセの出現を抑える。社会全体のリスク認識・理解の向上を目指す AIG 総合研究所は、社会に問いかける課題とともに、どのような伝え方がリスクに関する「わかった」を増やすことができるのか、常に考えていきたいと思っています。

(注) グローバルリーダーシップの開発や組織の多様性を活かし、生産性向上に向けたトレーニング、コンサルティング・ウェブツールを提供しているコンサルティング会社 <http://www.aperianglobal.com/>。

(出所)

GlobeSmart, Aperian Global

山岸俊男+メアリー・C・ブリントン (2010年)「リスクに背を向ける日本人」講談社現代新書

石黒浩 (2015年)「アンドロイドは人間になれるか」文春新書

※本ドキュメントは保険もしくはその他一切の金融商品の販売を意図したものではありません。また、本ドキュメントは具体的な特定の取引をご提案するものではなく、その実現性を保証するものでもありません。

※AIG 総合研究所(以下「AIG」と呼びます。)は、本ドキュメントの利用あるいは利用の結果に関して、その正確性、精度、信頼性などについていかなる表明および保証も行わないものではなく、その利用の結果については責任を負いません。AIG は、本ドキュメントがいかなる場所においても適切であり利用可能であることを表明するものではありません。AIG は、正確かつ最新の情報を本ドキュメントで提供しよう合理的な努力をしていますが、誤差・脱漏が生じる場合があります。

※AIG あるいは本ドキュメントの企画、作成または提供に関わるいかなる当事者も、お客様が本ドキュメントを利用したことあるいは利用できなかったことに起因する直接的、偶発的、結果的、間接的損害あるいは懲罰的賠償の責任を負うものではありません。

※本ドキュメントに掲載されている内容に関する権利は、AIG および AIG が利用許諾を得た著作権者に帰属します。無断で転用・複製・改変をすることはできません。